

## シカゴのインディアン — 転住の個人史と援助組織

青 柳 清 孝\*

The American Indian in Chicago :  
Migrations and Organizations for Assistance

Kiyotaka Aoyagi

キーワード：アメリカ・インディアン，シカゴ，都市，転住計画，  
リザーベーション（保留区）

## 問題の所在

1970年代はアメリカ・インディアンの歴史にとって大きな転換期であった。それはアフリカ系アメリカ人の公民権運動に刺激され、彼らが部族集団の枠を超え、先住民としての権利回復のため政治的・文化的運動を展開し、やがて全国的なアメリカン・インディアン・ムーブメントへと発展したからである。さらに、この時期にアメリカ・インディアンとしての共通意識が確立した。筆者はこの70年代にはじめてアメリカ・インディアンの調査研究をオクラホマで行なったが、調査地のオクラホマでもその運動の影響が見られた。特に、平原14部族の共同で開催されたアメリカン・インディアン・エクスポジションと命名された催し（部族文化を象徴するパウワウの共演、パジェント、ジェロニモ肖像の有名インディアン殿堂入り儀式など）の内容にその影響が顕著であった。（青柳1982）

こうした運動の高まりが見られる一方、部族の実体は1950年代以降急速に変化してきていたとみてよい。変化を促してきた重要な要因のひとつは、インディアンの都市移住・集中化の顕著な傾向であった。1990年の国勢調査によれば、

インディアン総人口約140万のうちその50%以上が都市地域に居住しており、リザーベーション（保留区）に居住するのは、わずか25%程度に過ぎない。都市居住者の増加によって、同一部族に属する都市居住者と保留区居住者の関係はどうなるのか、前者にとって保留区は何を意味するのか、都市生活者としてインディアンはどのような問題に遭遇しそれを解決するにはどのような方法や戦術がとられたのであろうか、都市に到着する移民と彼らの間には都市適応のうでで何か違いがみられるのであろうか、もし違いがあるとすれば、それは何によってもたらされるものなのであろうか、インディアンの政治的・文化的運動と大都市集中化の傾向との間には、何か関係があるのかなど、多くの問題意識を持つことになる。ここでは、シカゴで筆者が1996年と97年の夏に行なった調査研究結果のうち、転住インディアンが直面した問題とそれを解決する上で彼らがとってきた手段・方策について予備的考察を行なってみよう。<sup>1)</sup>

シカゴのインディアンは、連邦政府の転住計画の実施以降、すなわち1950年代から顕著な増加を示している。転住計画<sup>2)</sup>の主目的は保留区居住の部族成員から希望者を募り、ロサンゼルス

\* 文化人類学 アメリカ研究

ス、シカゴなどの都市に転住させること、その上で保留区の住民として彼らに保障されていた連邦政府の保護を打ち切るというものであった。これは、従来連邦政府がインディアンを保護監督する政策を終結する政策の実施として注目される。このような転住が押し進められた背景には、元来失業者の多かった保留区が、第二次大戦後帰還兵を迎えて一層その数を増し、経済状況が悪化していた事実があげられている。本報告は、この転住計画が実施される以前のシカゴへの来住者と転住計画による来住者両方の語る転住の回顧を紹介し、併せてその中に記述されているインディアンの援助組織・団体、および転住計画による援助について考察する。

シカゴは人口規模からいって全米第3の都市で、陸上交通の要衝。鉄道交通発達以前、すなわち1830-40年代には、ミシガン湖畔に位置するシカゴは湖上交通によって東部に、イリノイ・ミシガン運河(1848年開通)によって近隣内陸地帯に繋がった。この運河はシカゴにとって周辺州の農業生産物・材木集荷の動脈となり、さらにシカゴは牛肉加工生産販売によって都市として発展した。それ以前のシカゴ地域には、先住のポトワトミが毛皮の交易を目的としてやってきたフランス・イギリスの商人と村を作っていた。しかし彼らは都市の形成に直接関わることはなく、その主役は東部からの転住者やヨーロッパ移民であり、南部から移動してきた黒人であった。(Cronon 1991)

1990年現在、278万強の人口規模の都市シカゴにおいて、インディアンの比率は0.3%に過ぎない。<sup>3)</sup>しかし転住者の大半はシカゴ・アップタウンに集住し、<sup>4)</sup>そこにインディアンのコミュニティが形成されることによって、彼らの存在は顕在化したといえるであろう。さらに、全国的運動へと発展した1970年代のアメリカ・インディアン・ムーブメントの発地点はシカゴ

であった。それ故その小規模な人口にも拘らず、彼らの存在は社会的・文化的に大きなインパクトを持つようになった。本論の考察の対象も、アップタウンに生活するインディアンと彼らが築きあるいは利用してきた組織・団体・制度が中心となる。以下、(a)シカゴのインディアン・コミュニティ、(b)転住計画以前の転住者、(c)転住計画下の転住者、(d)インディアンの援助組織と機能、(e)今後の研究課題の順に報告する。

### (a) シカゴのインディアン・コミュニティ

インディアンのコミュニティがあるアップタウン(Uptown)は、シカゴ・ダウントウンを走るループ(電車交通システム)から北へ伸びる高架電車交通システムで5マイルの近辺に位置する広さ2.25平方マイルの地域を指す。東はミシガン湖岸、西はクラーク、北はブリンモア、南はクラーク通りに囲まれた地域である。

アップタウン(元レイクビュー・タウンシップ)は住民の希望で1889年にシカゴ市に合併された。同市域発展の端緒は19世紀後半に遡り、20世紀への移行期にアップタウンと他の市域を繋ぐ公共交通機関建設と人口増により活気を呈し、1920年代には商業地域かつ居住地域として充実した。東に魅力的な景観をそなえ、またレジャー活動に適したミシガン湖畔を持ち、当時のシカゴで一流のホテル、病院、アパートが立ち並び、商業も栄え、アップタウンはシカゴ・ダウントウンとシカゴの北に位置するエバンストン市のダウントウンの中間にあって最大の商業地区を擁することとなった。

しかし、29年に始まる経済大恐慌の打撃は大きく、以後アップタウンは衰退に向かった。衰退から立直れなかった理由として、新しい道路建設による人口流の変化、湖畔の埋め立てによ

る湖畔の遠隔化、シカゴ有名店のエバンストン進出などが挙げられている。従って、50年代に急増したインディアン転住者が到着した時期は衰退後のアップタウンであった。インディアンをも含めアップタウンへの人口流入は30年代、40年代と続き、それに対応すべき住居は既存アパートの小規模化改造によったため、人口の稠密化現象、居住条件の悪化、オープンスペースの減少、自動車路と駐車施設の狭隘化を招いた。1960年代には、人種、民族、職業その他において一層複雑・異質化した地域社会となっていた。1990年の人口は63,839を数え、白人46.9%、アフリカ系24.6%、インディアン1.0%、アジア系14.5%、ヒスパニック22.6%、その他12.9%と報告されている。<sup>5)</sup> この報告において言及するインディアンの組織・団体は、このアップタウンにある。

## (b) 転住計画以前の転住者（以後、計画前転住者と略記）

本節で利用する資料は、NAES College 所蔵のインタビュー資料に基づいている。<sup>6)</sup> 被面接者の大部分は、1951年の転住計画実施以前に保留区からシカゴへ移動してきたインディアンである。面接者も被面接者も各24人のインディアンであり、質問は主としてシカゴに転住してからの住居、職、社会的差別、保留区との関係、インディアン組織、病気・アル中などについて行なわれている。面接は、1982年12月から84年6月の間にまちまちに実施されている。被面接者のうち14人だけが面接内容を公開してもよいとしている。14人のうち4人が転住計画による転住者であり、他の10人は同計画とは関係のない転住者である。その10人のうち、8人が計画前転住者である。

本節ではその8人のうち、シカゴ来住年代、男女および出身部族を考慮して、次の4人（表(1)のA, C, H, K）を選び、その人びとの回顧物語を要約紹介してみたい。物語の不明の箇所は、物語の趣旨を損なわないように最小限の修正をしておいた。

表(1) 8人の出身部族・州・男女別

来 住 年	個人記号	部 族	出 身 州	性 別
* 1937	(A)	ウイネバゴ (Wisc)	ウィスコンシン	男
* 1949	(C)	アラバマ・コウシャタ	テキサス	男
* 1940	(H)	サンティ・スー	ネブラスカ	女
* 1937	(K)	ウイネバゴ (Neb)	ネブラスカ	女
# 1953	(D)	チベワ	ウィスコンシン	女
# 50年代	(F)	チベワ	ミネソタ	女
# 1955	(I)	オネイダ・スー	ウィスコンシン	女
# 50年代	(N)	パパゴ	アリゾナ	女

(注) \*は転住計画以前の来住者のうち、本節で紹介した人。

#は転住計画に従った来住者のうち、次節で紹介した人。

ネブラスカ・ウイネバゴは、ウイネバゴの一部がウィスコンシンから移動し、最後に行き着いた先で保留区を与えられた人びとである。ウィスコンシンに留まったウイネバゴには集住地域はあっても、彼らにとっての保留区は存在しない。

**(A) (男性 ウィスコンシン・ウイネバゴ 16  
分の13の血を持つインディアンとして部族登  
録。妻はオネイダで、リロケーションでシカ  
ゴへ)**

学校：公立校1年，宗派学校に1年。その後，ウィスコンシンのTomahの学校に行ったが，学年を1年下げられた。農業労働に我々を使うため，政府の学校を卒業させようとしなかったのが理由だ。Tomahの学校は8学年まで。それからミネソタのPipestoneに行つて6年間とHaskell（インディアンの学校）で1年勉強した。

転住：ウィスコンシンのある庭園で働いた。それが1日1ドルの稼ぎ。それで姉妹がいるシカゴへ来る決心をした。1937年のこと。その時7セント持っていただけ。姉妹のところに同居した。あとで，1週2ドルのアパートを見つけた。だからやれた。シカゴでは工場の流れ作業に従事。インディアンの都市移動はすでに始まっていて，SP（個人名）はBIA（Bureau of Indian Affairs，インディアン局）からお金を貰つて，ミシガン，ネブラスカなどを歩きインディアンの職探しをやっていた。このSPが私の工場で働く口を見つけてくれた。私のいた工場にはインディアンが沢山いた。しかし，隔週毎に一時解雇。2-3週間働けないこともあった。私のように未婚者が先に一時解雇された。だからびくびくしていた。そうこうするうち，ギリの兄弟がシェフをしていて，彼に料理の手ほどきをしてくれるよう頼んだ。まず皿洗い，それから料理を習った。博物館や図書館でレシピを勉強した。1955年と6年の2年間会計の勉強をした。40才の時だった。そして56年，ある会計士のところで働き，新しい会計システムを作成するのを手伝った。

差別：差別を差別だと意識することが最初出来

なかった。白人を恐いと思った。彼らが上にいて私が下にいる。命令されれば，何も考えないでそれをやるだけ。故郷には，びつこのインディアンが沢山いた。保安官がインディアンを走らせる。そして撃つのだ。それは白人とインディアンの間なら当たり前のことと思っていた。

組織：シカゴでインディアンに会えたのは，月に一度のカウンシル・ファイヤーの会合に出たからだ。ドロップ・イン・センター（アル中対策のため設けられた。後述）は私がやった。酒はシカゴに来て欠かせなかった。ハッピーな時間が欲しかった。故郷でも14-15才のころ，夜こっそりベッドから抜け出して，仲間と墓場へ行つて飲んだ。しかしセント・オーガスチンのアル中対策プログラムで働くようになり，その時の経験を生かして，インディアン・センターの所長になった時，同じプログラムを始めた。

保留区：仕事から身を引いても故郷へ帰らない。シカゴにいる。ここは私にとって刺激に充ちたところ。図書館，学校，クラブ，博物館など何でもここにある。ウィスコンシンの保留区に帰つても私の価値はゼロだ。

**(C) (男性 アラバマ・コウシャタ。東テキサ  
スのリビングストン出生。妻も同部族)**

学校：リビングストンの白人高校，その後オクラホマのインディアン・スクールへ。

転住：母が死んだ1938年に私は故郷を離れた。その後軍隊に志願してベーリング，アリユーションなどへ行つた。42年と43年にはシカゴを通過した。除隊して1945年にシカゴへ来たが，すぐテキサスの父に会いに行き2-3日過ごし，ふたたび入隊した。合計8年軍隊にいたことになる。45年の時はシカゴに来たら将来どうなるかを考えていた。1949年1月6日除隊後故郷に帰り，ふたたびシカゴに来た。シカゴ来住当初は

ホテルに泊り職探しをした。キャディラックの運転を頼まれてやったが、持ち主はギャングだったのかと思う。それから、鉛管製造会社の職を得た。雇用主はイタリア系でタフな人。彼の死後、その妻が会社を継いだ。一回私の給料を少なく支払ったので黙ってそこを辞めた。次も溶接の仕事。その会社には何人かインディアンがいたが、辞めていった。そのうち仕事が無くなり一時解雇者が出てきた。私は自分から決心して、1965年に辞めた。今は別の鉄鋼工場で働き8年になる。

保留区との関係：私が保留区から来た最初の人間。少し遅れて同じ保留区から来た男がいる。一緒にアパートに住み、家賃を折半した。そのうち彼は酒を始め、一晩でも飲むことがあった。言っても駄目。彼は保留区に帰っていったが、またシカゴへ戻ってきた。今私は66才。退職したらどこへ行くかな。保留区か息子のいるフェニックス。ヒューストンもよく知っている。イリノイのストリームオーターには娘が家を持っていて孫が3人いる。

組織：少年のころ、インディアン村のプレスビテリアン教会によく行った。ここでは、ブエナ・プレスビテリアン教会に行く。ベルモント通りのインディアン・チャペルにも行ったことがある。1945年インディアン・センター（北ラ・サル通り）でボランティアとなった。センターがシェリダンに移ってから行かなくなった。年のせい。当時多くのナバホがいた。そのなかには、センターを自分たちでやろうとしていたが、酒飲みでそれどころではなかった。ナバホは保留区へ帰ったのか、センターには、あまり来なくなった。

**(K) (女性 ネブラスカ・ウイネバゴ保留区出身。1才半のころ父死亡。母と離別。1才の**

### 時から祖母による養育)

学校：7才の時、ひとことも英語を知らないでインディアン・ミッション・スクールへ入学し5年生まで学んだ。そのあとウイネバゴ公立校に。

転住：36年に結婚し、翌年シカゴへ来た。息子が6-9ヵ月のころだった。私の義理の姉妹のつれが私の夫の仕事を見つけてくれたので、夫が先にシカゴへ来た。政府所管倉庫での仕事。フラートン近くのパーリングに家具付きワンベッド・アパートに住んだ。うしろのアパートに義理の姉妹が住んでいた。彼女しか知らなかった。私に淋しかった。それからバーウイン（アップタウン）に移った。当時カウンスル・ファイヤーが唯一のインディアンの集まり。夫はよくその会合に出掛けた。私はインディアン・センター（北ラ・サル通り）のことを知って行くようになった。教会ははじめ、私の親族J Eの行くサウスサイドの教会にいていたが、今は時たま行くだけ。普段はムーディ・バイブル・チャーチに行く。その教会の牧師は大半がインディアン。

私達は戦争中イースト・インディアナに移った。そこの陸軍の衣裳工場で働いた。1943年、そこからネブラスカに帰り娘を出産した。そこで生みたかった。シカゴへ戻った時は、クラーク通りに近いウェブスター通りに住み、あとから私の母と養父が保留区からやって来て隣に住んだ。

保留区との関係：農場に住むならともかく、保留区には仕事があるわけではない。スー・シティとかオマハとか都市に行くかしなければ。私が保留区へ帰ってもそこはあまりにも私にとって違い過ぎるだろう。ここが私の家。保留区のリーダー達は知り合いとか家族とかでなければ成れない。私はそういうのが嫌いだ。でも部族

員登録をしているので、定期的に選挙に加わる。私の収入は戦死した兄弟のエステイトから少額のお金が入ると、ウイネバゴが連邦政府に行なった請求に基づく支払いを受けている。それと亡夫の社会保障金がある。

#### (H) (女性 1915年ネブラスカのサンティ・スー 保留区に出生)

学校：1年から12学年まで、すべて政府の学校で勉強。それで、夏以外は保留区で過ごすことは殆どなかった。それに、私の育った家族は崩壊していたから。Haskellを卒業した時に結婚し故郷に戻った。相手は学校時代の友達でサウス・ダコタ出身のスー。それは大恐慌が過ぎたところで仕事がなかった。夫の兄弟が一人シカゴにいて、私たちをシカゴに来るよう誘ってくれた。

転住：1940年シカゴに来た。夫にはすぐ仕事が見つかった。私もしばらくしてからD社で仕事にありつき、2年働いた。戦争が始まると仕事が増え、給料のいいところ、いいところへと移っていった。4人の子供がいたから。軍隊にいった私の兄弟は、コレヒドールで捕虜となり、死の行進をさせられた。彼が捕虜となったことに對して、夫は海軍に入隊した。それはインディアン流のやりかたと言っていい。46年に除隊した夫は病気になった。それで私は残りの一生を働くことになった。その時私はもう40才になっていた。

インディアンはサウスサイドに住んでいるということだったが、知り合いになる機会がなかった。後にクラーク通りにインディアンが住んでいると聞いて行ってみた。そこで友人が出来た。ノースサイドに転居したのも、インディアンの集まりがあるということだったから。インディアン・センター（シェリダン通り）で知り合い

になった人もいる。Ready-men<sup>7)</sup>から出発して、私たちは段々インディアンと知り合って、インディアン風に生活するようになったと言える。

保留区との関係：私はとても小さい保留区の出身。ネブラスカでただひとつのスーの保留区と思う。そこには何も無い。私が5才の時、両親はそこを離れ、サウス・ダコタへ移動し農場を買った。だから私は実際にはサウス・ダコタ育ち。父が亡くなり、母の再婚の相手が私たち6人を育てた。

1967年夫が死亡。その時、シカゴから子供たちを夫の保留区に送り、カトリックの学校に行かせた。母がその近くに住んでいた。夏には私がそこに行って子供たちと一緒にいた。子供たちは成長したらシカゴへ来るのだと言っていたが、そういうことになった。その子供たちも結婚して家を離れていった。シカゴはいいところ。保留区には帰らない。ここにいっても、インディアンと一緒にいる。彼らの活動のあるところに私もいる。かつて私はセンターの理事だったが、健康を害して辞めた。

上記4人の物語に共通するのは、その理由に違いはあっても、保留区よりシカゴが自らの生活の場であると認めている。保留区に戻る積極的理由を持っていない。保留区は保守的なあるいは遅れた場所と述べる人たちは、都市で解放されたと感じる人たちであろう。シカゴ転住前に受けた学校教育については、以下のようなことが言えるであろう。保留区育ちの者にとって十分な学校教育は、30年代・40年代にあっては望むべくもない。しかも、同一の学校で落ち着いて学べることなく、親の移動に伴い転校を余儀なくされ、あるいは中途半端となっている。また、職業訓練を受けて都市へ転住してきた訳でもない。生活機会に恵まれない保留区を後に

してシカゴへ来たが、そこでも働き口を見つけるのは容易ではなかったということも共通している。インディアンの集まる場所・組織・団体を訪れ、仕事の情報を集めることが重要であった。親族や知り合いも情報提供者として大切な存在であった。

### (c) 転住計画下の転住者（以後、計画転住者と略記）

Donald Fixicoが、シカゴの転住計画について次のように記述している。(Fixico 1990, pp. 111-130)

「1951年、シカゴにBIAのフィールド・オフィスが開設された。最初はナバホの転住者を対象としたが、すぐにすべてのインディアンを扱うことになった。1952年2月に、442人のインディアンがシカゴに到着した。1956年8月には「公法959」が議会を通過し、それによって従来の職業訓練が改善実施された。これを機に「転住計画」から「雇用計画」に名称が変更となった。1953年から1956年の間に、都市転住者のうち、故郷へ帰っていった人達は全国で30%とBIAは発表。これに対して、「転住計画」に批判的立場の人の意見では、その割合が30%ではなく75%だとしている。故郷に帰ってしまった理由として、職業上の単調さや職業的関心の喪失、広々した故郷への憧憬、人種差別などが主なものとしてあげられる。また、シカゴのアップタウン、ロサンゼルス、Bell, Bell Gardensのように転住者が集中した地域は、劣悪な生活環境である。シカゴでは、転住者に対してアメリカン・インディアン・センターやセント・オーガスチンが各種のサービスを提供し、パウワウ、ダンス、ボーリング、ソフトボールなど社交の機会を提供した。転住者のうち、資格やリーダー

シップのうで優れていた者は保留区へ帰ることは少なかったという。】(要旨)

本節では、シカゴへの計画転住者（表1のD, F, I, N）が、BIAから何を提供されたかという点と、シカゴに来住以来30年を経過した80年代になって、故郷の保留区をどう眺めているかという点に絞って彼らの物語を紹介する。

### (D) (女性 バッド・リバー保留区のオダナ (ウィスコンシン) 出身のチペワ)

小学1年の時、両親は離婚し、その時私は母と保留区を離れたように思う。しかし4年生の頃帰ってきた。私は母と同じように保留区のカトリックの高校へ行ったが、いやで中途退学した。しかしシカゴに来てから成人学級で勉強したり、トルーマン・カレッジ（アップタウン）でいくつかコースをとるなど勉強した。ただ健康を害してそれ以上は諦めた。

母と養父が2-3年私たちより先にシカゴへ来た。私も2人の姉妹とその時一緒に来る筈だったが、父のいる保留区に残った。私がシカゴへ来たのは1953年、娘がひとりいたので連れてきた。私はシカゴで同じチペワと結婚した。シカゴではBIAから食物、家賃、衣類を少し支給された。トイレ・シャワー共有のアパートをノースサイドに見つけそこに入居した。姉妹も同じ建物に住んだ。仕事を見つけるのは大変だった。私はナーシング・ホームで長年清掃の仕事をやっていた。セント・オーガスチンからも援助を受けた。

保留区との関係：姉妹が保留区へ戻って仕事を探したが駄目だった。私は保留区へ帰っても2-3日するとシカゴへ帰りたくなる。保留区といえば、パウワウのことを覚えている。故郷へは年に2-3度帰っていたが、健康を害してから、今では年に1回くらい。だが、部族に関す

る選挙には最近参加している。保留区には父、2人の姉妹と私の子供のうち2人と孫が6人いる。シカゴは病院へ行くのに時間が掛からなくていい。店も沢山ある。

(I) (女性 オネイダ・スー ウィスコンシン・ラインランダー生まれ)

1955年に来住。シカゴを選んだのは故郷が一番近かったから。私たちは小さな町に住んでいたが、まったくひどい差別。“インディアンと犬はお断わり”というサインを大半の店が掲げていた。子供たちは白人の子供に虐められた。私の子供をそんな目にあわせたくないと決心した。リロケーションはもっと人を選別すべきであった。来なくてもいい人がいた。家も仕事も持ち、そして退職した人を私は知っている。BIAは私たちに職業訓練のクラスを開いた。私はCPS社で15年働き、請求書調整係の上役にまでなった。夫はエンジニアの資格をとって働いた。サウスサイドに家を購入したが、後にそこから今の家を買って移ってきた。シカゴに25年。居留区に居たらこうはいかなかっただろう。

(F) (女性 チペワ ミネソタのホワイト・アース保留区)

子供が3人になった時にシカゴへリロケーションで来た。サンフランシスコ、オハイオの都市(都市名不明)、シカゴのいずれかを選べた。故郷に近かったのでシカゴを選んだ。最初夫が来て、BIAの斡旋で職にありつくと私たちを呼び寄せた。BIAは汽車の切符と最初の給料が入るまでのお金を呉れた。仕事が見つからなかったとか、見つかったも給料が安かったりして、そういう時に3-4回故郷へ帰ったことがある。BIAの斡旋でインディアナのゲイリーに働きに行っていたことがある。故郷よりシカ

ゴのほうがずっといい。故郷では親の大きすぎる服を子供に着せるところを、シカゴならシアーズで買えばいい。

(N) (女性 パパゴのピマ アリゾナ出身 夫もパパゴ)

父は4年シカゴにいたことがある。1952年両親、兄弟姉妹とシカゴへ来た。父と父の親友が8月に来て、私たちは3ヵ月遅れで。父たちは多分アリゾナからリロケーションで最初に来たインディアンだろう。ダウントウンのBIAは当時インディアンをウエストサイドに行かせたのではないかと。近くにはチョクトーやスーの家族がいた。皆倉庫で働いていたのでよく知っていた。保留区では、父は6人の家族を食べさせるのにやっとだった。ネブラスカ、カンサスと麦作地帯を農作業で半年も家を空けていた父は、リロケーションのことを聞いて飛びついた。農作業が大変なうえ、父は家族から離れて生活することがいやだった。父はシカゴに来た時、25年居ようと言っていたが、ユニオン・ステーション(鉄道駅)で29年か30年働いた。それから4-5年の後故郷へ父母は帰っていった。

以上、計画転住者4人の物語から、次のような点が注目される。転住先の都市の選択は転住希望者の側に任されていた。(I)や(F)はシカゴが近かったからと述べている。保留区出発の際、目的とする都市までの片道切符を支給される。目的地ではBIAの斡旋でホテルにはいり、その間にアパートを探して入居する。どの地域に住むかについて、BIAが指示したのではないかとNは述べているが、確かではない。(D)は、BIAから当座の食料、家賃、衣類を支給されたと述べている。職の斡旋や訓練もBIAがおこなっていた。多くの転住者は政府所管の倉庫でまず働き始めている。これらBIAによ



る援助は計画前転住者には与えられなかったものである。

Nの父母は30年近くシカゴで働いた後、保留区へ帰って行った。(N)自身も複雑な心境でいるらしい。故郷へ帰るのは、人生の一番幸福の日と思うが、一方ここには沢山の友がいる。私は故郷で家族しか知らない。故郷へ帰れば、また新しい友をつくらなければならないと言う。他の3例(IDF)ではシカゴのよさを挙げている。健康のすぐれない(D)はシカゴなら病院にすぐ往ける、(I)は働いて今のような家を手に入れることは故郷では出来ない、(F)はデパートのような存在を都市の便利さと受け取っているようである。いずれも、極めて生活密着型の実際的なことをその理由として挙げている。

計画前転住者4人の場合、(C)のみが退職後どこに住むかについて決めかねている。彼にとってシカゴはその選択肢のひとつに過ぎない。他の3例は計画転住者と同様、故郷よりシカゴが自らの場所と強く意識している。故郷では自分の価値は無である(A)、保留区はあまりにも違いすぎる(K)、故郷へは帰らないとする(H)の言葉にそれが表れている。さらに(H)が「インディアンと一緒にいる。彼らの活動のあるところに私もいる」と述べる時、それは都市インディアンであることを積極的に表明するものであろう。

#### (d) インディアンの援助組織と機能

計画転住者はBIAからの援助を享受できた点では、計画前転住者より都市への定着が有利であったであろう。これに対して、BIA援助無しの時代の計画前転住者にとっては先発の親族や友人、部族クラブが頼りであった筈である。

ところで回顧物語にたびたび登場してくるセ

ント・オーガスチン・センターおよびアメリカン・インディアン・センターと転住者との関係はどうであったろうか。両センターの活動は1950年代に始まっているので、計画前転住者よりは、計画転住者にとって大きな意味を持っていたように思われるかも知れない。しかし実際のところ計画前転住者もこれらの組織の誕生あるいは活動に関わり合ってきたことを証言している。多かれ少なかれ計画前転住者は知人・親戚の援助を受ける側から援助活動に積極的に参加する側へと転化した例であろう。両センターとは別に、カウンスル・ファイヤーや部族クラブの存在も言及されているが、前者はインディアン・センターへと発展的に解消し、後者部族クラブの大部分は現在では消滅してしまっている。諸種の文献から少なくとも過去に9つの部族クラブが存在していたことが明らかである。そのうち、現在でも活動的なのは、ウイネバゴ・クラブのみである。部族クラブは計画前転住者にとってどのような役割を果たしていたのだろうか。改めて調べてみたい。本節では、今日まで活動を続けるインディアン・センターとオーガスチン・センターについて簡単に紹介する。

#### i) アメリカン・インディアン・センター (American Indian Center, Inc.)

インディアンに対する最初の社会奉仕の機関として1923年に「インディアン・カウンスル・ファイヤー」(原名Grand Council Fire of American Indians)が結成された。このカウンスル・ファイヤーを引き継いだのがアメリカ・インディアン・センターであった。センターは発足当時(1953年)、「All Tribes American Indian Center」と呼ばれ、北ラ・サル通りのインディアンの集住地域に設立され、その後シェリダン通りに移動し、現在は西ウィルソン通り

にある。同組織は1955年、アメリカン・インディアン・センターと改名されたが、この頃迄にシカゴのインディアンは約3,500人を数え、彼らは約50の保留区ないしは部族グループの出身者であった。

センターの目的のひとつは、インディアンが都市生活に効果的に参加できるように計ることとされている。発足当初、運営資金はイリノイ女性クラブ連合などの援助、1957年と58年には、SH財団から合計270,000ドルの援助を受けた。他方、インディアン自身による募金活動も開始されていた。例えば全部族アメリカ・インディアン・パウワウの開催による募金活動などがそれである。1968年にはセンターのプログラムが増大し、大きな設備を必要とした。センターの援助を必要として訪れて来た人数は1年に延べ6,500人にのぼった。その中には継続してセンターの社会活動に参加していた人も多数含まれていた。センターでの経験を生かしてより大きな組織において活躍する人も出てきたと60年代までの状況が報告されている。(Tjerandsen 1980) 各種常設委員会(プログラム、食料、慈善、広報など)活動のほかに、臨時の活動も報告されている。例えば、「インディアン・アップタウン・ハウジング・コミティ」はアップタウンの再開発に反対、他の組織と連携し、貧困者大会を開き、アップタウンを中産階級の地域に作り替える市の計画に反対した。(1968年12月)。さらに、第1回アメリカン・インディアン連合大会、ヘッドスタート、セン・ハイスクールのアウトポスト計画、埋葬費用募金活動などが行なわれたと報告されている。(A.I.C. 1955-1968)

センターは所長、理事会、上記各種委員会で構成され、役員選挙にあたっては16才以上のセンター会員が選挙権を持つ。定期的な持続的活

動には、各種の社会奉仕の他に、パウワウ(月々、6月のメモリアル・デー、秋季)、美術・工芸、種々の催し、旅行、サマーキャンプ、野球チーム、ミス・シカゴが挙げられる。

## ii) セント・オーガスチン・センター (St. Augustine's Center for American Indian, Inc.)

この組織はインディアン・センターと社会奉仕の面では同類の機能を果たしてきた。しかしその成立はインディアン・センターがインディアン自身の手によるものであったのに対して、セント・オーガスチンはエピスコパル派の宣教プロジェクトとして1961年に出発した。その主導者となったのがパウエル司祭であった。センターの隣には同派の教会(1963年12月献堂式)があり、同じシェリダン通りにある。このセンターの活動のひとつとしてドロップ・イン・センター(Drop-in-Center, 1973年発足)の運営がある。それは路上生活や貧しいアパートに住むインディアンのアル中患者の救済を願って、食事サービスを朝昼晩と行うセンターである。1日の利用者は100人前後という。

1979年に児童福祉法が通過すると、1980年には諸種の理由・原因で家族から引き離されてしまっている子供たちを家族へ引き戻す、または養護家族を斡旋する仕事にオーガスチン・センターは着手した。社会奉仕、アルコール対策、児童福祉事業に対して、官民から総額約70万ドル(1996年)の資金援助を受けている。

センターの隣にあるチャペルの日曜の礼拝にはインディアンが出席するが、その数は減少してきている。これはインディアンの居住地域の拡散化と関係があるように思われる。パウエル司祭の説教では部族文化の大切さが強調され、礼拝堂内にはディック・ウエスト、スコット・

ノーマンディ、ラルースカ（クワキウトル）らの彫刻、ナバホ職人製作の燭台、オセージ・オレンジ・ウッドを材質とした十字が配置され、堂入り口の右壁にはデービッド・ウィリアム（コマンチ）の油絵が掛けられている。

### (e) 今後の研究課題

転住計画の一環として、都市定着を容易にするため、BIAはアパートと雇用の斡旋、職業訓練を行なった。しかしそれは決して充分ではなかった。それを補う組織としていち早くインディアン・センターとセント・オーガスチン・センターが誕生したのである。両センターの社会奉仕が現在も必要とされていることは、インディアンが直面する持続的に不安定な生活条件を反映していることを意味する。種々のサービスに加えて、それが職・住の情報を得られる場所であり、同時に社交の場となっていること、さらに、都市インディアンとしての文化的アイデンティティを形成し強化する機能を果たしていることにその重要性が認められる。BIAは都市のインディアンに対して何も文化的配慮を払わなかったのに対して、インディアン・センターはパウワウの主催や美術活動などを通じてインディアン文化を昂揚してきた。オーガスチン・センターの場合は、パウエル司祭のインディアン文化に対する強いコミットメントと、インディアンの霊性を積極的にキリスト教信仰と結びつける彼の神学がセント・オーガスチンの宗教儀式を支えている。

しかしかかる組織の運営は容易ではない。インディアン・センターは特にその困難を如実に示している。資金の不足をパウワウやラメージ・セールなどの催しによって補う努力がなされているが、決して充分とはいえない。センター所

長の頻繁な交替は、運営の困難さを反映している。現在インディアンにとって一層重要性を増しているのは、経済活動や文化・芸術活動の支援である。その意味で例えばAIEDA（American Indian Economic Development Association）やAIBS（American Indian Business Association）などの役割が重要視される。これらの組織はシカゴ市など公的機関との連携・財政援助を受けることによって、その活動範囲を広げ活発化している。インディアンの教育支援にあたる Institute for Native American Development（トルーマン・カレッジ内）、あるいは健康・衛生管理と治療にあたる Chicago American Indian Health Services など、新しい組織が出来上がり、都市のインディアンの存在を支える方向にある。このような組織の誕生とその制度化は都市のインディアンのコミュニティを性格づけると共に、既存の一般市民を対象とした組織・制度とパラレルな側面を持つものである。筆者の現在の関心は、これらの組織の存立の基盤にインディアン文化の精神が据えられている事実である。この点に関しては別の機会に論じたい。

### 注

1) ここで提示する資料は1996年と97年に収集したものである。いずれも文部省国際学術研究「現代の諸都市における先住民社会の文化人類学的研究」（代表者：松山利夫，課題番号08041038）の基金を得て行なわれたものである。またラドンナ・ハリス（AIO）、フェイス・スミス、デービッド・ベック（NAES College）、ピーター・パウエル司祭（セント・オーガスチン）を始め、多数の方々の理解と協力によってこの研究が行なわれたことを記して、感謝の気持ちを表したい。

2) Relocation Program. 1951年から実施される。

- 3) U.S.Bureau of the Census, 1990 CP-1-15, Illinois.
  - 4) お互いに隣接するアップタウンとレイクビューはシカゴ市においてインディアンが集中している地域として知られていた。しかし1970年, 80年, 90年の国勢調査によると, このいわゆる伝統的インディアン地域からインディアンが主として市の北部と西部に拡散している様子がわかる。シカゴ市インディアン人口のうち, アップタウンのインディアン人口は, 1970年に18%, 80年には16%, さらに90年には9%と減少している。
  - 5) U. S. Bureau of the Census, 1990 CP-1-15, Illinois.
  - 6) The Chicago American Indian Oral History Project, Native American Educational Services, Inc.
  - 7) 来住インディアンを対象にした臨時の援助施設。ダウンタウンに設けられていた。
- 参考文献  
青柳清孝
- 1982 「部族のアイデンティティ」『アメリカ民族文化の研究』綾部恒雄編 pp.53-82, 東京: 弘文堂。
  - A.I.C.
  - 1955-68 *The Chicago Warrior* (Newsletter, vol.1, no.6-vol.17, no.6)
  - Cronon, William
  - 1991 *Nature's Metropolis : Chicago and the Great West*  
New York : W・W・Norton & Company, part I-II.
  - Fixico, Donald
  - 1990 The Relocation Program and Urbanization, in Terry Straus (comp. and ed.)  
*Indians of the Chicago Area*  
Chicago : NAES College Press.
  - Tjerandsen, Carl
  - 1980 *Education for Citizenship : A Foundation's Experience*  
Chicago : Emil Schwartzhaupt Foundation Inc.

## The American Indian in Chicago : Migrations and Organizations for Assistance

Kiyotaka Aoyagi

This is a preliminary report on the field data collected in the summers of 1996 and 1997. The objective of this study was to look at the urban processes of American Indians coming to Chicago before the Relocation Program (1951) and those Indians who moved to Chicago under the Program. For this purpose personal histories of both those who were relocated and those who were not relocated are presented. In addition, it is hoped that a comparison of these two groups will eluminate incipient features of the Indian communitiy in Uptown Chicago, particularly its organizational aspects. How organizations such as the American Indian Center and St. Augustine's Center for American Indian, Inc. evolved and what functions those organizations have assumed will be briefly explained.